

# 女性はどのようにイメージ化されてきたか (1)

## —神話に見られるジェンダー観—

鈴木 万里

### 序

人類によって作られた最初の人物像は女性を象ったものと言われている。ヨーロッパ各地で出土した旧石器時代後期に遡る「ヴィーナス像」<sup>(1)</sup>と呼ばれる石像を見れば、デフォルメされた女性像（垂れ下がった乳房と大きな臀部）が、いかに先史時代の人間たちを畏怖させ、また想像力を刺激したかを推測することができる。この時期には男性の全身像はほとんど現れない<sup>(2)</sup>。文化人類学者の調査によれば、狩猟採集生活を行う社会および農耕時代の初期段階では、食料調達における貢献度が大きいため、女性の地位が相対的に高いことが知られている<sup>(3)</sup>。すなわち、人類が地上に登場して以来99%を占める先史時代には、男女間の格差はそれほど大きくなかったと考えられる。しかし、「所有」と「支配」が進むにつれて、徐々に富や権力は一部の男性によって独占されるようになる。とりわけ近代の市民革命は「自由」や「平等」を掲げながらも、身分差別を撤廃して、代わりに性差別（sexism）と人種差別（racism）を際立たせる結果となった。状況がかなり好転しつつある現在でも、女性は世界の成人人口の50%を占め、公的労働の1/3、全労働の2/3を負担しながらも、世界の所得の1/10、資産の1%以下しか手にしていないという<sup>(4)</sup>。数の上からはマイノリティーとは言えないにもかかわらず、なぜこのような不公平が成立し、しかも長い間続いてきたのであろうか。男性のみならず、女性もまた、男女間の格差を当然のもの、ないしはやむを得ないものと見なしてきた、あるいは、見なさせるような圧力が常に存在したに違いない。

それでは、元来「女性」はどのような存在として定義されてきたのであろうか。本稿の目的は、文字化された初期の資料である神話—「創世記」（『旧

約聖書』), ギリシア神話, 『古事記』一の中で, 男女の成り立ちや相違点がどのように想定されているかを探り, 「最初の女性」がいかにか描かれているかを比較, 検討することである。この3点の資料を論考の対象とするのは, キリスト教とギリシア文化が, 西洋文化の価値観, 世界観の基層を形成している大きな柱であるため, そして, 日本人は独自の人間観を神話の中に表明しているためである。その後の歴史の中でこの「原像」は様々な解釈を施され, 姿を変えていくにせよ, 民族がその出発点で表現した女性観は, 圧倒的な影響力をもって以後の女性像に刻印されている。それでは, 「最初の女性」が「最初の男性」とどのような位置関係にあるか, そして, 彼女が「最初に何をしたのか」を中心に, それぞれの神話を分析してみることにしたい。

## 1. 「創世記」—エヴァー

『旧約聖書』は本来ユダヤ教の聖典であるが, キリスト教もまた, 『旧約聖書』の記述を基礎にして, その世界観, 価値観を受け継ぎ, 独自に発展させていった。従って, キリスト教の「最初の女性」は, 『旧約聖書』冒頭の「創世記」に登場し, 墮落後に「エヴァ」と名づけられる人物である。エデンの園では「女」(ishshah) または「妻」と呼ばれているが, 本稿では便宜上初めから「エヴァ」として扱う<sup>(5)</sup>。

神は6日間で天地創造を行い, 7日目に休息した。6日目には, 魚, 鳥, 獣に続いて, 人間を創造した, とされる。(1:1-2:4) この要約部分に続いて, 人間誕生の経緯がより詳しく語られる。(2:5-25) すなわち, 神は'adamah' (土のちり) で'adam' (人間) を造り, エデンの園に置いた。次に人間が「ひとりであるのはよくない」と考えた神は, 「ふさわしい助け手」を造るために人間を眠らせてその肋骨のひとつを取り, ひとりの女を造った。神がその女を連れてきた時, 人間は「男(ish) から取ったものだから, 女(ishshah) と名付けよう」と言う。ここで初めて性別が登場する。ただし, 「ふたりとも裸であったが, 恥ずかしいとは思わなかった」(2:25) という記述から, この男女は性的相違に気づかない未分化な状態で, 性的な能力も備えていなかったと推測される<sup>(6)</sup>。

この挿話で問題となるのは, 創造の順序と, 「助け手」という神による女の定義である。まず創造順が優先順位を導き出す点について検討する。神は「自分の形」に人間を創造し, 「男と女」を造った。(1:27) すなわち, 神は

「男と女」の両方を含む完全な存在であり、最初に造られた人間 adam はいわば両性具有的な性質をもち、後に「男」と「女」とに分けられた、と考えることができる<sup>(7)</sup>。しかし、原語のヘブライ語でも、その後翻訳されて広く読まれることになる、ギリシア語、ラテン語<sup>(8)</sup>でも「神」は男性名詞単数形であるため、「彼」と表記され「男性神」という印象が支配的である。そのため、神が自らに似せて造った人間は「男」であって、その一部から（しかも肋骨という些細な部分から）造られた二次的な存在が「女」であるという序列化が成立する。しかも、最初の人間 adam と、性別が分化した後の「男」とは異質の存在であるはずにもかかわらず、同じ名前と呼ばれるため<sup>(9)</sup>に、「女」はあたかもスピンオフした脇役のような印象を与えてしまう。さらに、「人間」と「男」は、多くのヨーロッパ系言語で同じ単語を使用する（man, homme など）ので、「女」は一層付随的な位置に押しやられる。以上のように、たとえ序列化が明確に意図されていたと断定はできないとしても、「創世記」における男女の成立過程は、女性の従属性もしくは劣性の根拠となる可能性を多分にはらんだ記述内容となっていることがわかる。

その上、創造順序による序列化のより意識的な意図を暗示するのが、ユダヤ伝説による、アダムの最初の妻リリト<sup>(10)</sup>の存在である。彼女は神によりアダムと同時に造られたが、アダムに従属性を主張されたために出て行った、とされている。彼女はひとりで子を産むことができるので、アダムを生殖のために必要とはしない。そこで神は、アダムに従属する第二の妻エヴァを創造した。解放された女性リリトはその後魔女として恐れられるようになる<sup>(11)</sup>。先行するこの挿話が「創世記」から欠落しているのは、『旧約聖書』の編集者たちが、男性と平等に造られた女性の存在を不都合なものとして抹殺することを選んだためであろう。とすれば、「第二の妻」エヴァの造られた経緯はやはり、女性の従属性を正当化するものと解釈されうる。なお、『旧約』、『新約』ともに正典の成立は、反女性的傾向が強くなった時期（紀元前4世紀から紀元頃と、1世紀末から約百年間）に当たっているという<sup>(12)</sup>。ユダヤの伝説では同時に創造されていた男女の神話が削除され、男性の優先権を示唆する改訂版の神話のみが創世記に採用されたのは、成立時の時代状況が大きく関わっていると考えられる。ちなみに、創造順位と序列に関する別の解釈の存在もあったという指摘が最近なされている。すなわち、「土」から造られた「人間」が材料である土よりも優れているのと同様に、「アダム」を材料に造られたエヴァの方がアダムに勝っている、という

17世紀のマリー・ド・ヴァロアの意見などである<sup>(13)</sup>。しかし、このような少数派はほとんど無視された。

次に「助け手」という神によるエヴァの定義について検討する。原語では 'eser (または ezer) と男性形が用いられており、『旧約聖書』中の用例の多くは「人間自身ではどうすることもできない場合の必要な神の援助という文脈で」使われ、従属や低価値という意味合いはないというトリブルの指摘がある<sup>(14)</sup>。参考までに、英訳では、1611年の Authorized Version では 'an help' と訳され、1970年の *The New English Bible, Second Edition* では 'a partner' となり、より対等の語に置き換わっている。しかし、第一の妻リートの存在を削除して、後に造られたエヴァを「最初の」女性像とした編集者の姿勢から判断して、「助け手」がアダムと同等の立場をもつ存在として位置づけられていたとは考えにくい。

以上のように、アダムとエヴァの創造をめぐる挿話は、それほど明確ではないにせよ、アダムの優位性を正当化する根拠を提示している。それでは次に、「最初の女性」エヴァが「何をしたか」、その結果、「何が起こったか」を辿ってみることにする。

エヴァが最初にしたことは、狡猾な蛇の誘いに乗って、神から固く禁じられていた「善悪を知る木」の実を食べたこと、さらにそれを夫にも与えたことである。(3:1-6) つまり、「人類最初の罪」を犯したのである。ここから、「女」は「騙されやすく」「愚か」というイメージが派生する。しかし、蛇はエヴァを「騙した」わけではない。むしろ真実を語っているのである。「(禁じられた木の実を食べても) あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」(3:4-5) 確かに、それを食べた後、「ふたり (アダムとエヴァ) の目が開け」(3:7) 神の言葉によれば、「人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知る者となった」(3:22) どうやら神は、人間を善悪の判断能力のない存在状態に留めておきたかったようである。羞恥心も倫理観も持たない人間を神は望んでいたことになる。実を食べる前は「ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」(2:25) が、食べた後は「自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた」(3:7) 神は、動物同様の生存状況を人間にふさわしいと判断したのであろうか。

いずれにせよ、実を食べる前は善悪を知らないのだから、蛇が狡猾で邪な

意図をもって近づいてきたかどうか、エヴァには判断のしようがなかったはずである。にもかかわらず、エヴァは「2番目に創造され、最初に罪を犯した者」というレッテルを貼られてしまう。しかも、自分のみならず、夫も巻き添えにして、神に背かせたと見なされ、「悪しき誘惑者」の役回りを与えられるようになる。しかも、この「罪」の報いはきわめて深刻である。すなわち、以後エヴァは「苦しんで子を産む」ことになり、「それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」(3:16)ここで、出産と夫への服従を義務づけられることになる。この後アダムは妻を「エヴァ」と名付ける。名前をつける行為は、その上に立つ者であることを示す。アダムはエデンですべての生き物に名前をつけていた<sup>(15)</sup>。(2:19-20)さらに、アダムは「一生、苦しんで地から食物を取る」(3:17)ようにと、苦しい労働を命じられ、「あなたは土から取られたのだから・・・ちりだから、ちりに帰る」(3:19)と、死を運命づけられる。こうしてふたりはエデンの園から追放されたのである。(3:23)楽園を追われた後、アダムは妻を「知り」エヴァは身ごもり、カインを産む。(4:1)ここから人間の生の営みが始まる。この懲罰の挿話が語っているのは、神の意志に背いたために、「死」と「生殖」が人間界にもたらされた、言い換えれば、「死」と「生殖」とは人間の罪ゆえに存在するということである。従って、これ以降「死」と「生殖」を繰り返していく人類はすべてこの「原罪」を背負っていると見なされる。しかも、そのきっかけを作ったのは「女」であることになる。ただし、原語であるヘブライ語の聖書には、世界の罪と悲惨の責任を女性に帰する箇所はないという<sup>(16)</sup>。しかし、キリスト教以前の時代の最も重要な翻訳であり、後にキリスト教会にとっても権威あるものとされた、『旧約聖書』のギリシア語訳『セプトゥアギンタ』(七十人訳聖書)―キリストの時代にはギリシア語が世界言語であった―には、次のような言葉がある<sup>(17)</sup>。「ひとりの女から罪は始まり、女のせいで我々は皆死ぬことになった」すなわち、かなり初期の段階で「女=罪=死」という、本来ヘブライ語の原典には明示されていなかった解釈が流布していたことがわかる。

しかし、見方を変えれば、この「女」の「罪」こそが人間に知恵をもたらしたと考えることもできる<sup>(18)</sup>。エヴァは神に反抗を試みたかったわけではない。「目が開け、神のように善悪を知る者」(3:5)となれると聞いて、「賢くなる」(3:6)ことを望んで、自分も食べ、夫にも勧めたのである。いわば、自らを高めたいという希望をもって自己啓発を行ったと言える。しかも、自分だけ偉くなろうと思ったわけではなく、けなげにも夫とともに存在

のレベルアップを目指したのである。その結果、「ふたりの目が開け」(3:7) 羞恥心と善悪の判断力を獲得するに至った。すなわち、人間界に「知」を導き入れるきっかけを作るといふ、偉大な業績を残したと考えられる。通常、神話では、禁止をものともせず、危険を冒して(しばしば大きな犠牲を払って)神の領域から貴重なものを持ち出して人類にもたらすと、英雄として賞賛される。ゼウスの禁を破って人間に火を与えたギリシア神話のプロメテウスがその好例である。エヴァの行為はまさに「英雄」にふさわしい。何しろ神の知を手に入れたのだから。ところが、彼女の業績は「知恵=文化をもたらす者」または「未知の領域への探求者」として賞賛されるどころか、むしろ、「罪」や「死」の原因を作った張本人として、その後長く非難され、警戒され、疎まれることになってしまう。そして、自発的に知恵を求めたエヴァは「傲慢」との烙印を押される。これはきわめて深刻な罪とされる。不当な評価というべきであろう。もしも、先に「禁断の実」を食べたのがアダムであったなら、みごとに神からの独立を果たした勇敢さゆえに「英雄」として崇拜されていたかもしれない。その場合には「創世記」は全く別の物語となっていたに違いない。

さらに、興味深いことに、神の禁止を破った者として同罪であるはずのアダムの責任は、次第にそれほど問われなくなっていく<sup>(19)</sup>。「創世記」では、エヴァは「出産」と「夫への服従」、アダムは「つらい労働」と「死」と、それぞれに処分を受けて、ふたりともエデンの園での安楽な生活から追放されたのであるから、神はほぼ同罪または共犯との判定を下したものと思われる。ところが、『新約聖書』には、あたかもエヴァだけが過ちを犯したかのような記述が見出せるのである。パウロは次のように書簡で述べている。「女が教えたり、男の上に立ったりすることを私は許さない。むしろ静かにしているべきである。なぜなら、アダムが先に造られ、それからエヴァが造られたからである。また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、過ちを犯した」(「テモテへの第一の手紙」2:12-14) この一節から、アダムは志操堅固で難攻不落、エヴァは無節操で知性も劣る、という印象をぬぐい去れない。しかも、創造順とエヴァ「のみ」の過ちを根拠に、従属と沈黙を女性一般に強制している点も見逃せない。しかし、蛇はアダムに声をかけていないのだから、彼は「惑わされ」ようがないはずである。

ところが、「創世記」には含まれないにもかかわらず、エヴァの劣性を証明するような挿話——蛇がアダムに近づかなかったのは攻略不能だと察知したためである、さらには、蛇はアダムを先に誘惑したが拒絶された<sup>(20)</sup>、な

ど、——が次々に生まれ、長く語り伝えられていくことになる。ルターの次の記述は、このようなアダムの擁護の伝統がヨーロッパに連綿と続いていたことを示している。「サタンは、アダムの方が優れていると思ったので、彼を襲う勇気がない。というのは、その試みが徒労に終わるのを恐れるからだ。そして、私は、また、もし彼が最初にアダムを試みたのなら、勝利はアダムのものだったろうと信じている。彼は足で蛇を踏みつぶして、言っただろう、『黙れ、主の命令はそうじゃなかった！』<sup>(21)</sup>」

さらに、アダムがエヴァの勧めに何ら躊躇も抵抗も示さず応じて、禁断の実を食べたこと（「女が・・・ともにいた夫にも与えたので、彼も食べた」3：6）に対しても、同様の論理でアダムの行為は正当化、ないしは情状酌量されていく。アウグスティヌス（354-430）によれば、「これが罪の共犯関係に巻き込まれることであってもなお、彼の唯一の伴侶から切り離されるのは耐えられなかった」ための英雄的な行為とされる<sup>(22)</sup>。さらに1200年以上を経て、John Miltonによる英文学の古典 *Paradise Lost* 『失楽園』（1667）では、アダムの姿は一層悲劇性を帯び、自己犠牲をも厭わない崇高な人物に描かれる。「お前と共に/死ぬ決意を固めた以上、わたしも亡びてゆかざるをえないからだ。/お前なしでどうやってわたしは生きてゆけよう？・・・お前の境涯からわたしは絶対に離れないつもりだ、幸、不幸いずれの場合にしてもだ！・・・わたしはお前と運命を共にし、同じ審判を受ける覚悟だ。・・・お前を失うことは、わたし自身を失うことだ<sup>(23)</sup>」かくして、アダムは同罪どころか、エヴァの犯した罪を自らも引き受ける英雄的な犠牲者とされるのである。しかし、原典である「創世記」のアダムは悲壮な決意を示すどころか、神に詰問されると、我身に非難を浴びずにすむように弁解する小心者に見える<sup>(24)</sup>。「私と一緒にして下さったあの女が、木から取ってくれたので、私は食べたのです」（3：12）自分の行為を反省するより先に、神や妻のせいになっている。以上のように、「創世記」では男女の罪に軽重はなく、等しく重大な違犯行為として描かれているにもかかわらず、キリスト教の初期の段階ですでに、エヴァのみの「罪」を強調する解釈が流布し、それが時の経過とともに一層入念に脚色されて、対照的にアダムの「美德」が拡大解釈されて描かれるようになったことは明らかである。

エヴァのみを悪徳と結びつける傾向は、エヴァ＝蛇（さらには、蛇＝サタン）という連想を容易にした<sup>(25)</sup>。この背景には、ヘブライ語のエヴァ *hawwah* が、同族のアラム語やアラビア語の「蛇」という語に似ているという事情があるらしい<sup>(26)</sup>。しかし、「創世記」ではエヴァの命名の理由を

「生きとし生けるものの母」(3:20)であるからと明示しており、蛇との関係は全く述べられていない。従って、「女」のセクシュアリティに恐怖や嫌悪を抱く男性の意識の中で、女性性が危険視され、邪悪なものとして長らく認識されてきたことを示すと考えられる。さらに別の解釈も可能である。古代の近東文化圏の創造神話には、男性神と女性神との権力闘争および「女性的なもの」が退治、征服されて、男性神が支配権を手にする物語が必ず含まれるという。たとえば、メソポタミアの創造神話『エヌマ・エリシュ』では、若い軍神マルドゥークが、創造の母である龍神ティアマートとの激しい戦闘を経て、ついに勝利をおさめ、ティアマートの死体を材料に天地を創る<sup>(27)</sup>。このような先行神話に登場する太古の女神(蛇神)——克服され、男性神の支配下に屈してコントロールされて初めて秩序がもたらされ、歴史が始まる——のイメージが、エヴァおよび蛇に投影され、両者を無意識のうちに結びつけたのかもしれない。

以上のように、「創世記」の「最初の女性」は、「2番目に創造され、最初に罪を犯した者」ないしは「墮落の原因」として解釈される根拠を与えた。その後、あらゆる女性は「エヴァの末裔」として、服従と社会的従属を当然視され、従順、善良、沈黙といった、男性に害を及ぼさない属性が女性には不可欠と見なされる。(cf. コリント I, 14:34)この三千年近く前の女性像とその解釈が、西洋の文化にきわめて大きな影響力を及ぼしてきたことは否定できない。

## 2. ギリシア神話—パンドラー

ギリシア神話に登場する「最初の女性」は、ゼウスが神々の力を結集して造らせた「パンドラ」である。ホメロスの同時代人であるヘシオドスが、『仕事と日々』および『神統記』<sup>(28)</sup>の中で描いている。ゼウスの禁を破ってプロメテウスは人間に火を与えたが、これに激怒したゼウスは人間に災いをもたらすために女パンドラを造り、プロメテウスの弟エピメテウスのもとに送る。エピメテウスは、ゼウスからの贈り物は人類に害をなすので受け取らずにすぐに送り返すようにという兄の警告を忘れ、パンドラを迎え入れる。彼女が壺の蓋を取ると、あらゆる災いや害悪が流出して四方に広がったとされる。それまで人類は病気や災難に悩まされることはなかったが、これ以降、数限りない悪疫や災禍が人間を襲うようになったという。こうしてゼウスの意図は実現され、人間に処罰が与えられたのである。



それでは、パンドラはどのような女性として造形されているのであろうか。まず、火と鍛冶の神へパイストスが土と水とを混ぜ、声と動きを与える。顔は不死の女神を型どり、愛らしい乙女の姿にする。アテナは機織りの技術を教え、アプロディテーが魅力、欲望、苦悩を注ぎ込む。ヘルメスは悪賢さと恥知らずな心を植え付ける。仕上げにアテナは銀色の衣装と帯、見事なヴェールをつけさせ、さらに、へパイストスが細工を施した金の冠を被せる。ヘルメスは恥知らずな心と狡猾さを胸に注ぎ入れ、パンドラ（あらゆる贈り物）と名付ける<sup>(29)</sup>。神々が総力を挙げて作り上げた「最初の女性」は、美しく、魅力的で、悪賢く、信用できない人物造形となっていることがわかる。ここでも、「災いをもたらす原因としての女」としてのイメージが顕著に認められる。

次にパンドラが「最初に何をしたか」と、その行為の意味を検討してみる。そもそもこの壺はどこからきたのであろうか。ヘシオドスは壺の由来について何も語っておらず、この壺は唐突に物語に登場し、パンドラは当然のように壺を開けている。Before this time men lived upon the earth/Apart from sorrow and from painful work, /Free from disease, which brings the Death-gods in. /But now the woman opened up the cask, /And scattered pains and evils among men<sup>(30)</sup>。パンドラは開けることを禁じられていたわけでもなければ、誰かに（たとえばゼウスに）開けろと命じられていたわけでもない。悪意や奸計に基づく行動でもない。この壺の出処については、神々からの贈り物を詰めた壺を彼女自身が持ってきたものだ（嫁入り道具のようなものか）という説や、この壺はもともとエピメテウスの家にあったという説（原語の pithos は古代ギリシアで貯蔵用に使われた大型の据えつけの「かめ」をさす）もあるらしい<sup>(81)</sup>。しかし、この壺について何の説明もされていないことは、かえってパンドラと壺の一体性を示していると考えられよう。エーリッヒ・ノイマンによれば、「女性性の中心的象徴は容器」<sup>(82)</sup>であるという。つまり、パンドラ＝壺なのである。「容器という元型的象徴が女性性の化身」<sup>(33)</sup>であるとすれば、壺の中から出てきたあらゆる災いや疫病は、パンドラの体内にあったことになる。ここから、壺＝子宮というイメージの連鎖は容易に導き出される。その開口部から外に出ることは、誕生を意味する。さらに、壺 pithos は貯蔵用のみならず、埋葬にも使われたという<sup>(34)</sup>。とすれば、壺は生と死の領域であり、人間の宿命でもある。つまり、パンドラはその魅力的な姿態の裏に、生と死を司る恐るべき「母なる神」の属性を潜ませていることがわかる。ヘシオドスは、女の先祖であるパンドラ

から、「女の出産が派生し、女は死すべき男と暮らして、男の大きな悲しみとなる」<sup>(35)</sup>と述べている。ここでも、パンドラ=壺=子宮という関連が明らかである。そして、女性の身体が悪の住みかであるとのメッセージを強調している。

「パンドラの物語」はヘシオドスの作品を通じて西洋文化に入る。そして、とりわけキリスト教世界では、「エヴァの物語」を補強するのに好都合な題材となった。ルネサンス期には、オランダの人文主義者・神学者であるエラスムスの書き換えによって、パンドラ自身が諸悪の根源である「箱」をエピメテウス家に持ち込んだことになる<sup>(36)</sup>（ヘシオドスよりも、こちらの方が一般に流布している）。16世紀の司教の言葉は、パンドラがエヴァとパラレルな存在として受取りうることを示している。「聖書のエヴァは、かじりついて禁断の果実をあけ、それによって世界に死が侵入した。それと同じようにパンドラは、神の命令に反抗して箱を開け、それによって、あらゆる悪と限りない災難が解き放たれ、不運な死すべき人間を、数えきれない病で圧倒した」<sup>(37)</sup>ここでは、神の禁止を破って許されない罪に走る、反抗的で愚かな「女」という共通のコンテクストでとらえられていることがわかる。（パンドラは神に禁止されていなかったことは、都合よく忘れられている）すなわち、ヘシオドスが *kalon kakon*（美しき禍悪）<sup>(38)</sup>と呼んだパンドラは「第二のエヴァ」として、ヨーロッパの伝統に組み込まれていったのである。

以上のように、「エヴァ」と「パンドラ」という西洋文化の根本に位置するふたりの女性像はいずれも「災いと死」を人間界にもたらした者として定義されている。あらゆる悪は「女」の存在と本性によって生み出され、「女の身体」は悪の住みかであるとされる。欲望をそそり、死という恐るべき闇に引き込もうとする。この認識は、女性が未知の領域すなわち「他者」としてとらえられていること、言い換えれば、男性のみの視点から描かれていることを示している。「知」や「生」の導き手である側面はまったく無視される、または、それすらも「傲慢」、「軽率」、「罪に対する懲罰」として解釈される。すなわち、これらの「最初の女性」をめぐる挿話は、女性に同一の権利を与えず、従属や服従を正当化する口実としての神話として機能していることがわかる。

### 3. 『古事記』——イザナミ——

次に、西洋文化とは異質の伝統をもつ日本神話の女性像について考察する。日本神話は主に『古事記』（712年）と『日本書紀』（720年）によって伝えられているが、正史として編纂された『日本書紀』よりも『古事記』の方が古い神話の原形をより多く留めていると考えられるので、本稿では、『古事記』の記述に基づいて分析を行う。ただし、二書の本文が著しく食い違う箇所では、『日本書紀』も検討の対象とする。日本神話では『聖書』やギリシア神話と比較すると、神と人間の境界が曖昧であり、「最初の女性」が誰であるか判断しがたい。本稿では、神ではあるが、最初に性別が明示され、しかも結婚の儀式と国生みの経緯が詳しく語られる「イザナミ」を取り上げる。それでは、「イザナミ」はどのような女神で、「最初に何をしたか」を見てみる<sup>(39)</sup>。

天地開闢の後、五柱の神々が登場し、さらに、神世七代と呼ばれる神々が出現する。その七代目の一対の神々が「イザナギ（伊邪那岐）」と「イザナミ（伊邪那美）」である。日本神話の最初の夫婦は、天つ神の命により、ただよっている国を固めて造ることになり、天の沼矛（ぬぼこ）でかき回し、引き上げると、したたり落ちる塩がかさなり積もって島となる。その島に降りて天の御柱と、八尋殿（御殿）を立て、ふたりは結婚の儀式を始める。二神が共同で作業してカオス（混沌）から国土の創造を行う点は注目し得る。古代中東神話やギリシア神話では、太古の出来事として男性神と女性神との闘争や、男性神が女性（母）神を制圧する過程が最初に述べられ、中心となる神話世界が始まる時期には、すでに男性神による支配体制が成立し、秩序がもたらされている。ところが、日本神話では夫婦が協力して事業を進めるので、「最初の女性」が何を「ひとりで」したかは、かなり後（イザナミの死後）まで特定できない。

結婚の儀式の手順は、この時点で「男/女」の差異が初めて確認され、いずれを優先すべきかという試行錯誤の過程が示されているので、きわめて重要である。まず、イザナギが「汝が身は如何か成れる」<sup>(40)</sup>（あなたの身体はどんなふうになっていきますか）と問うと、イザナミは「吾が身は、成り成りて成り合はざる處一處あり」<sup>(41)</sup>（私の身体は、出来上がって出来きらない所が一箇所あります）と答える。するとイザナギは「我が身は、成り成りて成り餘れる處一處あり」<sup>(42)</sup>（私の身体は、出来上がって出来過ぎた所が一箇所

あります)と告げて、次のような提案をする。「此の吾が身の成り余れる處を以ちて、汝が身の成り合わざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さむと以為ふ。生むこと奈何」<sup>(43)</sup>(私の出来過ぎた所をあなたの出来きらない所に差し入れて、国を生み出そうと思う。どうだろうか)イザナミは「然善けむ」<sup>(44)</sup>(それがよいでしょう)と同意する。ここで、ふたりはお互いの身体構造の違いを認識し、性別が成立する。生殖は人体の構造上きわめて道理にかなった行為として描かれている。出産もまた、共同作業としてとらえられていることは、男性神が「生み成さむ」という表現を使っていることから明らかである。

次に、天の御柱のまわりをイザナミは右から、イザナギは左から回って、出会った時に、まず女神が男神を褒め讃え、続いて男神が女神を褒め讃える。ここでイザナギは「女人先に言へるは良からず」<sup>(45)</sup>(女が先に言ったのは良くない)と告げるが、性交渉の後、子供がふたり生まれる。それは「ヒルコ(水蛭子)」(手足が無いか、または骨がない子。障害児らしい。流産か死産とも考えられる)と「淡島」で、ヒルコは葦船に入れて流してしまったという。国生みがうまく出来ないので、二神は相談して、天つ神のもとに赴いて尋ねたところ、天つ神は占いをして「女先に言へるに因りて良からず」<sup>(46)</sup>(女が先に言ったから良くなかった)と原因を分析し、帰ってもう一度やり直すよう忠告する。指示通りに改めてやり直してみると、今度は首尾良くはこび、淡路島、四国、九州、本州など次々に国土が生まれていくことになる。

この挿話で問題になるのは、発話における男女の優先順位が、結婚および国生みという大事業の可否に直接関わっているという点である。イザナギも天つ神も一致して失敗を「女が先に言った」ことに帰している。イザナギはすでにわかっていたことを、なぜわざわざ天つ神に相談したのであろうか。失敗の原因が明らかなのだから、ただちにやり直してもよさそうなものである。そもそもイザナミはなぜ先に発言したのであろうか。おそらく、神話の成立当時の日本ではかなり女性の発言権が強く、女が男に先んじて何かをすることが、かなり当然のように行われていたと思われる。それならば、イザナミも自分が先に声をかけることにまったく躊躇や遠慮がなかったはずである。しかし、男性優先の傾向が次第に強まり、大事業の成就(たとえば国家統一のような)に当たっては「男が先にすれば、うまくいく」とのメッセージを浸透させたかったという政治的意図が、背後に存在すると推察される。しかし、それまで特に従属的な位置にいなかった女(イザナミ)がすぐに納

得するはずもないので、イザナギは第三者（天つ神）の裁定を仰ぎ、天の声として「男性を優先させるべし」とのお墨付きを必要としたのであろう。すなわち、これは男性優先に移行しつつある社会における、権力構造の変化が反映された神話と解釈できる。しかし、失敗をイザナミひとりの非として、責任を問うたり、罰を与えたり、服従を求めたりせず（神だからかもしれないが）、ふたりで改めてやり直し、結果がよければすべて良し、とするあたりは、きわめて寛容でおおらかな態度である。「創世記」の過酷な懲罰の世界と比較すれば驚異的とすら思える。見方を変えれば、責任の所在を曖昧にしがちな日本人らしい行動パターンが、すでに神話の段階でも明らかだと言えるかもしれない。

前述のように、国生みは夫婦の共同作業であるので、「イザナミが何をしたか（ひとりで）」は、死によって夫と別れてから語られることになる。（日本神話では神さえも死を免れない。しかも出産がもとで亡くなるという、きわめて人間らしい女神である）この夫婦神は十四の島々と三十五の神々を生むが、イザナミは火の神を出産した際に火傷を負い、やがて亡くなる。一般にあらゆる神話において火をもたらし挿話は重要な意味をもつ。火は料理や金属加工技術などの文化を表すと同時に、比喩的に「闇を照らす」すなわち「意識」や「知」の象徴でもある。しばしば火を持ち込むためには大きな犠牲を伴う（プロメテウスのように、また「知」を手に入れたエヴァも同じ機能を果たしている）。ここでも、イザナミは火と引き替えに死をこうむることになるが、この「火」と「死」のモチーフは日本神話では、あまり強調されてはいないように思われる。むしろ、それに続くイザナギの冥界への旅の挿話が重要な意味をもつ。

最愛の伴侶を失ったイザナギは嘆き悲しみ、妻を埋葬した後、怒りに駆られて火の神の首を剣で斬り、殺してしまう。それから、「黄泉國」に妻を訪ね、一緒に造っている国がまだ完成していないから、帰ってきてほしいと頼む。一方イザナミは、すでに黄泉國でものを食べてしまったので、迎えが遅すぎたことを残念がる。しかし、最愛の夫がせっかく来てくれたので、帰りたいたいと思ひ、黄泉神と相談してみると言う。そして「我をな視たまひそ」<sup>(47)</sup>（私をご覧にならないで下さい）と言い残して立ち去る。イザナギは長い間待っていたが、とうとう我慢できずに、妻の禁止を破り、櫛の齒をひとつ取って火をともして見てしまう。すると、蛆のわいた凄まじい腐乱死体が目に入る。恐ろしくなって逃げ帰ろうとすると、イザナミは「吾に辱見せつ」<sup>(48)</sup>

(私に恥辱を与えた)と言って、冥界の軍勢を引き連れて追いかけてくる。イザナギは応戦しつつ、やっとの思いで、黄泉比良坂(冥界と現世の境界)に辿り着き、大きな岩で通路を塞ぐ。岩を挟んでふたりは言葉を交わす。イザナミは、「如此為ば、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さむ」<sup>(49)</sup>(こんなことをなさるなら、あなたの国の人間を一日に千人殺します)と言う。それを聞いたイザナギは、「汝然為ば、吾一日に千五百の産屋立てむ」<sup>(50)</sup>(そんなことをするなら、私は一日に千五百の人間が産まれるようにする)と答える。こうして、イザナミは黄泉津大神と名付けられる。

この挿話でようやく「最初の女性イザナミが何をしたか」が明らかになる。「死」をもたらしたのである。自らも死に、そして人間にも死という運命を与え、黄泉津大神すなわち死の女神となったのである。エヴァやパンドラ同様に、イザナミもまた人間界に災いを導き入れる役割を担っていることになる。しかし、イザナミの場合には、彼女自身の落ち度ではなく、夫婦喧嘩が直接の原因であり、しかも元を辿ればイザナギが妻の頼みを聞かずに醜い死体を見てしまったためなのである。従って、どちらに非があるとも言えず、やはり責任の所在が明らかでない。一方的に責任を負わせることもしない。また、一般に神話やおとぎ話には「～してはならない」という禁止がしばしば登場するが、違犯者は程度の差はあれその報いを受けねばならない。「創世記」、『青ひげ』、『古事記』の「トヨタマヒメ」の出産場面、『鶴の恩返し』などがよい例である。ちなみにヨーロッパでは違犯者は女性であることが多く、罰も過酷である。ここでは、違犯者が男性であること(日本の民話にはこのパターンが多い)、しかも特に報いを受けていないことが特徴的である<sup>(51)</sup>。それどころか、この後イザナギは汚れを清めるため禊ぎを行い、アマテラス、スサノオその他の重要な神々をひとりで生み出すのである。怪我の功名と言うべきであろう。一方イザナミも、夫が禁止を破ったことよりも、恥ずかしい姿を見られてしまったことに激怒している。日本文化を「恥の文化」と呼んだルース・ベネディクト<sup>(52)</sup>の定義は『古事記』の時代にまで遡ることができるのかもしれない。

このように日本神話の「最初の女性像＝イザナミ」はエヴァやパンドラに比べると、主体的な行動が欠如しているように見える。これは、夫婦での共同作業が多いことに加えて、原因や責任をあまり追及したがない日本人のメンタリティによるものであろう。したがって、古代中東や西洋の神話のように、女性が災いや悪の源泉として激しく糾弾されることもない。むしろ、後述するように「あらゆる害悪」のもとには男性神となっているのである。し

かも、その男性神は不行跡に対して罰を与えられ、追放されはするものの、長く非難を受けることはなく、その後の物語では英雄視されるという注目すべき展開を辿ることになる。

黄泉下りの汚れを清める禊ぎをしたイザナギは、その際に合計二十二の神々を生み出す。そして、左目を洗った時に現れるアマテラス（天照大御神）、右目を洗った時に現れるツクヨミ（月読）、鼻を洗った時に現れるスサノオ（須佐之男）が、次世代の主演となる。（ただし、ツクヨミはこの後まったく登場せず、もっぱらアマテラスとスサノオの姉弟神が中心となって物語が進行する）イザナギは最後に立派な三神を得たことを喜んで、アマテラスには「高天の原」（天上世界）を、ツクヨミには「夜の食國」（夜の世界）を、スサノオには「海原」を治めるよう任命する。この三神の分割領域に関しては、『日本書紀』の本文および追記にはかなりの異同が見られるが、アマテラスが高天原・天上を統治する点では、すべての記述が一致している。アマテラスとツクヨミは命じられた通りにそれぞれの世界を治めたが、スサノオだけは従わずに、長い髭が胸に達する年頃まで激しく泣き喚いていた。そのため、山は枯れ、河や海は干上がってしまい、「萬の物の妖（わざわい）」<sup>(53)</sup>（ありとあらゆる害悪）がたちまち発生したという。命じられた国を治めない理由をイザナギに問いただされると、スサノオは亡き母のいる「根の堅州國」（黄泉の国）に行きたくて泣いていると答える。これを聞いてイザナギは激怒し、「然らば汝は此の國に住むべからず」<sup>(54)</sup>（それならお前はこの国に住んではならぬ）と言って、スサノオを追放処分にする。この挿話が興味深いのは、「あらゆる災い」の原因となって天界を追放されるのは、日本神話ではスサノオという男性神であることだ。さらに、スサノオは懲りない性格らしくこの後も乱暴をはたらいて、アマテラスが天の岩戸に隠れる（皆既日食の擬人化）という非常手段に訴えたため、再び「萬の妖（よろずのわざわい）」<sup>(55)</sup>をまねき、事態を重く見た八百萬の神々によって厳罰に処され（数多くの品物を供出させられ、髭を切られ手足の爪を抜かれて）、追放されて人間界へと降ることになる。ところが、害悪の源泉として、天界から追放されたスサノオはその後、反省の色もなく人間界で大活躍し、ヤマタノオロチ（八俣の遠呂智）を退治してクシナダヒメ（櫛名田比売）を救って結婚し、数多くの神々を生む。いわば英雄物語の主人公となるのである。どうやら、罰を受ければ以前の暴虐や乱行は帳消しになるものらしい。過去に犯した過ちを未来永劫背負って生きなければならぬ、という発想は皆無であ

る。かえって、流謫の英雄が好まれる（たとえば須磨、明石での光源氏や源義経など）という「敗者の美学」の萌芽が認められると言えよう。

このように日本神話では、一方的に男性のみに優先権を与えたり、女性を従属的な位置に貶めることはなく、男・女いずれを上位に置くかについてにかなりの迷いと妥協があったことがわかる。これは、女神アマテラスを天皇家の祖と仰ぐ神話の性質上やむを得ないことであつたであろう。しかし、次第に男性を上位とする傾向を強めつつあつた当時の社会情勢の変化は、次に述べるアマテラスとスサノオの誓約の場面における『古事記』と『日本書紀』の記述内容の相違点からうかがい知ることができる。

スサノオはイザナギから追放処分を受けた後、アマテラスに挨拶するため高天原に上る。しかしスサノオの勢いが凄まじいので、山河が騒ぎ、大地が揺れる<sup>(56)</sup>。それを聞いたアマテラスは驚いて、弟が高天原を奪おうとしていると誤解し、男装して武器を携え、迎え撃つ準備を整える。姉に来訪の意図を問いただされたスサノオは、「僕は邪き心無し」<sup>(57)</sup>と断言して、実はイザナギに泣き騒ぐ理由を尋ねられて亡き母の国に行きたいと言ったところ、追放されたので、別れを告げに参上したと説明し、「異心無し」<sup>(58)</sup>（謀反心はありません）を強調する。弟の言葉に疑いをもつアマテラスが、それならあなたの心の清いことがどうしたらわかるでしょうと問うと、スサノオは「宇氣比」<sup>(59)</sup>（うけい・誓約）をしてそれぞれ子供を生んでみようという提案する。二神は天の河をはさんで誓約をする時に、まずアマテラスがスサノオの剣を三段に打折り、水を注いでかみ砕き、霧のように吐き出すと、三人の女神が生まれる。次に、スサノオがアマテラスの勾玉に水を注いでかみ砕き、霧のように吐き出すと、五人の男神が生まれる。そこでアマテラスは、五人の男神は自分が身につけていた勾玉から現れたので自分の子であり、三人の女神はスサノオの帯びていた剣から現れたのであなたの子です、と裁定を下す。これを聞いてスサノオは、「我が心清く明し。故、我が生める子は手弱女を得つ。此れに因りて言さば、自ら我勝ちぬ」<sup>(60)</sup>（私の心が清く正しかったので、私の生んだ子は女だったので。これによって言えば当然私の勝ちです）と大はしゃぎをする。つまり、「女の誕生」が「心の正しさ」の証明となっているのである。ところが『日本書紀』では逆に、スサノオは誓約を提案する際に「是女ならば、濁き心有りと以為せ。若し是男ならば、清き心有りと以為せ」<sup>(61)</sup>（これが女ならば、悪い心があると思って下さい。もしこれが男ならば、清い心があると思って下さい）と、「男の誕生」が「心の正



しき」を示すとされているのである。『日本書紀』のこの挿話には「一書曰」（あるふみにいわく）という別伝が三種類ついているが、いずれも「男＝心の正しき」という点で一致している。おそらく、正史である『日本書紀』の編纂者は、儒教思想の影響の下に男性上位のイデオロギーを浸透させる意図をもって、この部分を書き換えたと思われる。そのために、『日本書紀』本文の記述では、女神を生んだスサノオには謀反心があったことになり、アマテラスの疑いが正しかったことが証明されたにもかかわらず、武装して戦いも辞さない構えであったアマテラスが、反逆を企てた弟をまったく咎めないという矛盾した展開になっている。

以上のように、日本神話では、最初の女性イザナミが「死」をもたらす神として描かれていたものの、次世代ではスサノオという男神が「あらゆる害悪」の原因とされており、男・女いずれかに一方的に非を押しつけるという傾向は認められない。しかし、イザナギ、イザナミの結婚の儀式における発話順のくんだりや、アマテラス、スサノオの誓約における記紀の食い違いなど、重要な場面で女性の権限を抑えて男性優位を確立しようとの意図がうかがわれるのは注目に値する。また、日本神話では男/女の境界がしばしば超えられるのも特徴的である。アマテラスはスサノオとの戦いに備えて男装し、後にヤマトタケルはクマソ制圧の際に女装して敵の屋敷に忍び込む。いずれも戦いという重大な局面で、男/女の境が一時的に通過可能になる点は特徴的である。さらに、スサノオが成人してからも亡き母親を慕って泣き叫んだり、兄弟神の陰謀で殺されたオオクニヌシが母神の取りなしで生き返るなど、「母」の影響、支配が強く表れている。おそらく古来の日本では、男/女が両極に位置して対立する存在ではなく、相互補完的で境界の曖昧な状態として認識されていたのであろう。それが、徐々にではあるが確実に、男性優位の社会構造に転換していく過程が神話の世界に示されているのである。

## 結 語

これまで、「創世記」、ギリシア神話、『古事記』に登場する「最初の女性像」と、彼女が「最初に何をしたのか」を中心に見てきたが、いずれの女性たちも「死」と結びつけられて描かれていることはきわめて重要な意味をもつ。これは、「女」＝「闇/未知の領域」との認識を示すものであり、言い換えれば、女性の「他者性」をもっとも際立たせる装置と言える。すなわち、程度

の差はあれ、神話は女性を政治的、社会的権力から排除する口実として機能してきたことが明らかである。

「創世記」の世界観、人間観を引き継いで構築されたキリスト教は、女性嫌悪をさらに強め、「男子は婦人にふれないがよい」(コリント, I, 7:1), また「私(パウロ)のように、ひとりでおれば、それがいちばんよい」(同書, 7:8)と、禁欲と独身を称揚し、結婚は不品行に陥らぬための必要悪と見なすに至る。また、イエスは、母と兄弟が来て外で呼んでいると群衆に言われて、「私の母、私の兄弟とは誰のことか」と問い、自分を取り囲んで座っている人々に向かって「ここに私の母、兄弟がいる。神の御心を行う物は誰でも私の兄弟、姉妹、母である」(マルコによる福音書, 3:33-35)と答える。生みの母さえも拒否するイエスは、ある意味で究極の「ひとり」を選んだ人物と言えるであろう。しかし、このような極端な男性至上主義にもかかわらず、やがてマリア信仰が人々の広い支持を集めることになるのは、皮肉な展開である<sup>(62)</sup>。とは言え、聖母マリアは「汚れなき処女」という理想化された女性像であり、抑圧され、排除された「他者」を理想化するのは、性差別のイデオロギーの一種である。それは、「他者」を邪悪な存在(魔女のような)として弾圧する行動原理と表裏一体を成している<sup>(63)</sup>。

一方、日本神話ではアマテラスという女神が中心となるので、女性優位の人間観をもつような印象を与える。確かに『聖書』のような極端な女性拒否は示されていない。しかし、アマテラス以下男系の血統が順次語られ、オシホミミ→ニニギ→ホオリ(ヤマサチヒコ)→ウガヤフキアエズ→神武天皇と続く支配権の継承を見る限り、やはり女性を政治権力から排除する機能を果たしていると判断せざるを得ない。また、アマテラスは男性神である日の神(太陽神)の巫女であるという説もあり、もしそうであるとすれば、男性による男性のための、権力掌握を正当化する「物語=歴史」ということが一層明確になるであろう。とは言え、男性神スサノオが「よろずの災い」を招き、追放される挿話を見る限り、日本神話ではある程度「男/女」のバランスを取ろうという意図がうかがえることも否定できない。

以上のように、神話は民族の最初の物語として、独自の価値観、世界観、人間観を提示しながらも、一方で、人口の半数を占める女性を権力構造から排除するための周到な論理を展開していることがわかる。長い歴史の中でこの論理はさらに入念に人々の意識の深層に組み込まれていき、さまざまな制度として具現化され、社会に浸透していく。いったん意識の中で女性が周縁化され、序列が制度化されてしまうと、たとえ現実の制度そのものを改正し

でも適正な関係を取り戻すには長い時間を要する。ここで原点に帰って、男/女の位置関係がどうあるべきかを考え直す端緒を、最初の物語＝神話は提供してくれるものと思われる。そして、神話の「再発見」が意識の基層に浸透している序列化および差別構造を解きほぐす第一歩となることを期待したい。

## 注

- (1) ネー・バンサドン『女性の権利——その歴史と現状』白水社（1983）p.15. チェコスロバキアや南フランスで発見された小像。あるいは、ヴィレドルフのヴィーナス（オーストリア出土）エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー』ナツメ社（1982）巻末の写真版 p.1.
- (2) ネー・バンサドン『前掲書』p.15.
- (3) E. モルトマン＝ヴェンデル『乳と蜜の流れる国—フェミニズム神学の展望』新教出版社（1988）p.77. および、スタヴリアーノス『新・世界の歴史—環境、男女関係、社会、戦争からみた世界史』桐原書店（1991）p.41.
- (4) コペンハーゲンで採択された「国連婦人の十年後半期プログラム」16項 cf. 辻村みよ子、金城清子『女性の権利の歴史』岩波書店（1992）p.182.
- (5) 「エヴァ」「エバ」「イヴ」「イブ」と日本語の表記は様々であるが、本稿では「エヴァ」を用いる。なお、最初の女性がこの名前で呼ばれるようになるのは、ギリシア語とラテン語への翻訳によって初めてなされるという。cf. エリザベート・ゴスマン編『女性の視点によるキリスト教神学事典』日本基督教団出版局（1998）p.28.
- (6) エリザベート・ゴスマン編『前掲書』p.31. 「アダムは遅くとも女性の創造されたときにイシュ'is つまり性別が明確に示される男性となるのであり、性別はいわゆる墮罪の結果生じたのではない」
- (7) キャロル・クライスト、ジュディス・プラスカウ編『女性解放とキリスト教』新教出版社（1982）pp.102-3, p.106.
- (8) 『旧約聖書』がヘブライ語で読まれた時期は短く、キリスト教以前ではギリシア語訳が2～3世紀通用し、西欧では、2種類のラテン語訳、Vetus Latina（古ラテン語訳）とVulgata（ウルガータ訳）が中世を通じて重要であった。cf. E. ゴスマン編『前掲書』p.185.
- (9) 絹川久子『聖書のフェミニズム』ヨルダン社（1987）p.41.
- (10) E. ゴスマン編『前掲書』p.178 および、ジョン A. フィリップス『イヴ/その理念の歴史』勁草書房（1987）pp.73-4.
- (11) イザヤ書 34：14 の夜の魔女はリトとされる。
- (12) E. ゴスマン編『前掲書』p.186.
- (13) E. ゴスマン編『前掲書』pp.33-4.

- (14) E. ゴスマン編『前掲書』p.30, 絹川久子『前掲書』pp.43-5, クライスト, プラスカウ編『前掲書』p.104.
- (15) 名付ける行為は相互性と平等の関係を墮落させたとトリブルは指摘している。cf. キャロル・クライスト, ジュディス・プラスカウ編『前掲書』p.112.
- (16) E. ゴスマン編『前掲書』p.29.
- (17) E. ゴスマン編『前掲書』p.30. この言葉はカトリック教会の正典にもおさめられているが, プロテスタント教会は正典としていないので, 外典の中に入っている。
- (18) C. A. ニューサム, S. H. リンジ編『女性たちの聖書注解—女性の視点で読む旧約・新約・外典の世界』新教出版社 (1998) p.34. 「蛇と共に彼女 (エヴァ) は文化をもたらした者である」ただし, 蛇をプロメテウスのような存在としている。
- (19) E. ゴスマン編『前掲書』pp.32-3.
- (20) (21) ジョン A. フィリップス『前掲書』p.100.
- (22) ジョン A. フィリップス『前掲書』pp.124-6.
- (23) ジョン・ミルトン『失樂園』第 9 巻, 906-916 行および 953-9 行.
- (24) C. A. ニューサム, S. H. リンジ編『前掲書』p.34. 絹川久子『前掲書』p.56. キャロル・クライスト, ジュディス・プラスカウ編『前掲書』p.110.
- (25) キャロル・クライスト, ジュディス・プラスカウ編『前掲書』p.108. および, ジョン A. フィリップス『前掲書』p.108. 蛇はユダヤの伝説では男性の誘惑者であったが, ラテン語訳で *serpens* (女性形) と訳したという。
- (26) ジョン A. フィリップス『前掲書』p.76.
- (27) ジョン A. フィリップス『前掲書』pp.21-2.
- (28) テキストは Hesiod and Theognis, *Theogony, Works and Days, Elegies*, (translated by Dorothea Wender) Penguin, 1973 による。
- (29) Hesiod, *Theogony*, ll. 571-84 および, Hesiod, *Works and Days*, ll.66-88. ただし, パンドラの身につけるものについては, 両者で多少の違いがある。
- (30) Hesiod, *Works and Days*, ll.96-100.
- (31) ジョン A. フィリップス『前掲書』p.41.
- (32) (33) エリッヒ・ノイマン『グレート・マザー』p.55.
- (34) ジョン A. フィリップス『前掲書』p.41.
- (35) Hesiod, *Theogony*, ll.590-3.
- (36) ジョン A. フィリップス『前掲書』p.50.
- (37) 16 世紀の人文主義者の司教ジーン・オリヴァーの言葉。cf. ジョン A. フィリップス『前掲書』p.300.
- (38) Hesiod, *Theogony*, l.585.
- (39) テキストは, 『古事記・祝詞』倉野憲司 岩波書店, 日本古典文学大系 (1958), および, 『日本書紀 上』坂本太郎ほか 岩波書店, 日本古典文学大系新装版 (1967) の, 読み下し文による。なお, 神々の名称は便宜上, カタカナ表記を用いる。
- (40) (41) (42) (43) (44) 『古事記』p.53.
- (45) (46) 『古事記』p.55.

- (47)(48) 『古事記』 p.65.
- (49)(50) 『古事記』 p.67.
- (51) 人間と動物の結婚物語についての分析は次書を参照。小澤俊夫『昔話のコスモロジー』講談社学術文庫 1994.
- (52) ルース・ベネディクト『菊と刀』教養文庫版。
- (53)(54) 『古事記』 p.73.
- (55) 『古事記』 p.81.
- (56) スサノオは暴風雨など自然の猛威を擬人化した神とも言われる。
- (57)(58) 『古事記』 p.75.
- (59) 『古事記』 p.77.
- (60) 『古事記』 p.79.
- (61) 『日本書紀 上』 pp.104-5.
- (62) カトリック教会は、当初マリア信仰を排斥したが、451年カルケドンの公会議で、正式に認めた。cf. 生駒孝彰『神々のフェミニズム—現代アメリカ宗教事情』荒地出版社 (1994), p.25.
- (63) 性差別のイデオロギーの3分類 1. 仕える者として客体化する。2. 身体を邪悪なものとする。3. 排除された「他者」を理想化する。cf. E. ゴスマン編『前掲書』 p.182.